

# 現代日本語における「ナキャ」の 多機能性について

—「ナケレバ」との比較を中心に

諸葛ヒョン

## ◆要旨

**現**代日本語の仮定形による条件文は、未実現の事態間の因果関係を表すのが中心的用法であるが、前件である条件節末の機能語が「条件」以外の機能を果たす場合がある。「ナケレバ」「ナキャ」においては、文の位置関係によってその機能は分類できる。「ナキャ」は「ナケレバ」の縮約形として、「ナケレバ」に見られる機能を同様にもつことができるが、両者の関係は同然とはいえない。非条件的用法への参与は「ナケレバ」は「評価的用法」に偏っているが、「ナキャ」は非条件的用法全般への参与度が「ナケレバ」より高い。「ナキャ」は「ナケレバ」より形態的独立性が高く、それに起因して単独形式として文中や文末、文頭に自由自在に現れやすい。

## ◆キーワード

ナケレバ節、ナキャ節、非条件的用法、機能語化、多機能性

## ◆ABSTRACT

In contemporary Japanese conditional sentences, the functional word located at the end of a conditional clause occasionally exhibit “non-conditional” functions. Since *nakya* is a contracted form of *nakereba*, the former has the same conditional functions as the latter. Their functional properties, however, are not identical. When we take non-conditional usages into account, we detect their discrepancies. Most instances of *nakereba* in discourse display the evaluative usage as a case of non-conditional usages. By contrast, *nakya* is widely employed to engender a range of non-conditional effects. Furthermore, the morphological boundedness of *nakya* is weaker than that of *nakereba*, and this is why *nakya* often stands alone freely at a sentence-initial, a mid-sentence, and a sentence-final position.

## ◆KEY WORDS

*nakereba*-clause, *nakya*-clause, non-conditional usage, change to a functional word, polyfunctionality

On the Polyfunctionality of *Nakya*  
in Contemporary Japanese  
In Comparison with *Nakereba*  
JEGAL HYUN

## 1 はじめに

条件文は、後件（主節）で表される事態の成立が前件（条件節）で表される事態の成立に依存し、かつ、前件が非現実の事態を表す（益岡1993）。未来の事態、まだ生起していない未実現の事態間の因果関係を表す「仮定条件」は、条件文の最も典型的・中心的な用法であり、その中で、順接条件をなす接続助詞として広く扱われるのが「バ」である。「ナケレバ」は、「バ」の上接述語の否定形であり、「ナキャ」は、通常「ナケレバ」の縮約形として、主に、話し言葉で用いられる。

条件表現「バ」の否定形としての「ナケレバ」は、主として、動詞の否定形や「無理だ」「むずかしい」などの否定の表現を文末に伴い、あることがらも成立しない場合には、別のことがらも成立しないという意味を表す（グループ・ジャマシイ1998）。また、「ナケレバ」は、現代日本語の代表的な義務表現である「なければならない」「なければいけない」の前項部として、運用上、後項部を伴わず、前項部単独で述語をなすこともできる。以上に示した文中・文末での「ナケレバ」の用例を以下に挙げる。

- (1) いくら貧しい人を助けても政治のあり方を変えなければ、意味はない、とマザーを批判した人もいるらしい。 (『インド』2004)
- (2) デジタル放送の話は、いつの間にか「だから受信料をしっかりと集めなければ」という主張にすりかわっていく。 (『週刊現代』2004)

(1)(2) はともに「ナキャ」と矛盾なく置き換えができる。では、「ナケレバ」と「ナキャ」は同様の機能をもつ形式として相違点はないのだろうか。本稿では、「ナキャ」の用法を文中の位置や上接要素に着目して統語的に検討し、「ナケレバ」との比較を通じて、現代日本語における「ナキャ」の用法をまとめる。これにより、「ナケレバ」と「ナキャ」の相違点を明確に記述するとともに、「ナキャ」に独自の用法と、制約があることを示す。

## 2 先行研究と本稿の目的

先行研究として、「ナキャ」そのものを研究対象とするものはほとんど見当たらず、「ナケレバ」の縮約形という位置づけに留まっている。「ナケレバ」に関する研究は、義務表現「なければならない」に着目したものを中心に多くの蓄積があるが、「ナキャ」に特化した記述は管見の限り見られない。

「ナケレバ」句の用法については、上述の(1)(2)のように、文中位置（文頭か、文中か、文末か）によって意味用法が分化していることがわかる。このような統語的観点から条件句を包括的に言及しているものとして、国立国語研究所（1964）がある。国立国語研究所（1964）では、条件句一般の基本的用法として、陳述的用法（すればいい）、前置き（といえ）、客観的用法（条件と呼ぶのが最もふさわしい、きっかけ、因果関係、前提など）と大きく三つに分類する。先に見た(1)は、客観的条件に相当する基本的用法となるが、この他に、陳述的用法、前置き用法を条件句一般の基本的用法と見ている点で特徴がある。

前田（2009）は、国立国語研究所（1964）を踏まえ、条件文の用法を改めて分類しているが、「リアリティー」の観点から「仮定的用法」「非仮定的用法」「非条件的用法」の三つに大別している。特に、「非条件的用法」については、仮定性も因果関係も持たないため、「条件」とは呼びにくく、ほとんどが固定的なイデオマティックであって、「条件」とは個別の表現として捉えるのが適切だと述べ、「非条件的用法」としては、「並立・列挙」「評価的用法」「終助詞的用法」「後置的用法」「接続詞的用法」があると指摘している（前田2009）。条件句一般の広がりを考える上で、このような統語的な観点からの観察は必要である。基本的用法か否かを考える際には、前田（2009）のように、本来の仮定条件の機能の有無に着目するのが有効であると考えられる。前田（2009）の分類に従うと「ナケレバ」の(1)は仮定的用法、(2)は非条件的用法の「終助詞的用法」に相当するが、「ナキャ」についても条件句一般の用法分化に即して、文中位置や共起する要素の偏りによって意味用法が分化していることが予想される。さらに、筆者は「ナケレバ」と「ナキャ」の関係は同然とは思えない。「バ」節一般と比較した「ナケレバ」の研究<sup>[註1]</sup>や「ナケレバ」と比較した「ナ

キヤ」の観察、記述の必要があると考えられる。

### 3 調査概要

本研究では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）」(BCCWJ-NT1.1)を用い、中納言(24)によって検索を行った。非コアデータを含む「書籍・出版」を調査対象とする。文字列検索を用い、検索語「なければ」を指定した結果、全15,642例が検出されたが、本調査では、その中で、表示順1000件<sup>[註2]</sup>を調査対象とした。また、「ナキヤ」の場合、「ナケレバ」と同様に非コアデータを含む「書籍・出版」を検索対象とした結果、全880件が検索され、対象外2件<sup>[註3]</sup>を除いた計878件を調査対象とした。

### 4 調査結果の分析——「ナケレバ」との比較を中心に

本稿では、前田(2009)の条件文の分類に従い、条件的用法と非条件的用法に分けて分析を行う<sup>[註4]</sup>。また、条件文の分類による「ナケレバ」と「ナキヤ」の出現現象を観察し、両者の相違点を比較する。まず、「ナケレバ」と「ナキヤ」の用法分布の概要を以下の表1に示す。数字は件数、( )内はパーセンテージを示す。以下の表も同様である。

表1 「ナケレバ」と「ナキヤ」の用法の様相

	条件的	非条件的				合計
		評価的	終助詞的	接続詞的	並列・列挙	
ナケレバ	217 (21.7)	762 (76.2)	10 (1)	1 (0.1)	10 (1)	1000 (100)
		783 (78.3)				
ナキヤ	150 (17)	548 (62.4)	159 (18.1)	18 (2.1)	3 (0.4)	878 (100)
		728 (83)				

「ナケレバ」の場合、条件的用法は21.7%であり、非条件的用法は78.3%を占めている。「ナケレバ」の非条件的用法としては、評価的用法が76.2%で最も高く、終助詞的用法と並列・列挙が各1%、接続詞的用法は見られるが0.1%

に過ぎない。「ナキヤ」の場合、条件的用法は17%であり、非条件的用法は83%で、非条件的用法に偏っており、「ナケレバ」より偏りの度合いが高いことがわかる。また、「ナケレバ」より終助詞的用法と接続詞的用法の割合が高いのが特徴的である。このように、「ナケレバ」と「ナキヤ」においては、条件的用法より非条件的用法の割合が高いという点は共通する。ただ、その分布状況はばらつきがあるように見える。次項からは、用法ごとに検討しつつ、両者の相違点について記述する。

なお、非条件的用法の内、「並列・列挙」については、ナケレバ1%、ナキヤ0.4%と、ともにごくわずかで、用例(3)(4)のように、「(で)もナケレバ(ナキヤ)～(で)もない」という固定化した形式をとる。「ナケレバ」「ナキヤ」の差異も見出しがたいため、本稿では扱いを保留する。「並列・列挙」用法と、他の用法との関係性も含め、今後の課題としたい。

- (3) どこかで誰かが、陰口をたたいているような、いやな夢をみたこともあった。これも運命でもなければ、宿命でもない。偶然の重なった出来ごとにすぎないと思う。  
(『負けてたまるか車椅子』2001)
- (4) しかもその後退が更に白イといどまれてまたまた後退を余儀なくされるのだ。金もいらなきゃ、名もいらぬ、わたしゃ隅の地が欲しい、なんて碁じゃいつまでも手はあがらんね。  
(『置碁の戒め』2005)

#### 4.1 条件的用法——主節の「形」と「望ましき」

宮部(2014)は、ト条件節においてスルト節かシナイト節か、すなわち肯定形か否定形かにおいてその用法が異なることを指摘し、主節に「望ましくないもの」をさしだす用法がト条件節が否定形シナイト節である場合に偏ることを示している。宮部(2014)では、シナイト節の従属複文において、主節を「形」だけではなく意味的な「望ましき」という観点から分析してその偏りを見出している。本調査では、この観点に基づき、「ナケレバ」と「ナキヤ」の従属複文の主節を分析する。

表2で明らかかなように、「ナケレバ」と「ナキヤ」の従属複文の主節は、形

式的に否定形である場合が6割以上であり、主節のことがら全体の望ましきにおいても、否定的となる場合に偏っている。特に「ナキャ」は、主節のことがら全体で否定的となる場合が98%で、ほぼ全体を占めていることがわかる。

表2 「ナケレバ」と「ナキャ」の主節の様相

	主節の形		主節の望ましき		合計
	肯定形	否定形	肯定的	否定的	
ナケレバ	88 (39)	129 (61)	52 (24)	165 (76)	217 (100)
ナキャ	58 (39)	92 (61)	3 (2)	147 (98)	150 (100)

また、「ナキャ」を受ける後件は、以下の用例(5)(6)のように、主節のことがら全体の望ましきにおいて否定的なものを導きやすいという傾向が顕著であるといえる。この傾向は、「ナケレバ」の場合も同様ではあるが、「ナキャ」の場合に、より際立っている。

(5) まっとうな時代の価値観は、つねに、際だった独創性とプロフェッショナルリズムが手をたずさえなきゃ、発展しませんから。

(『これでいいのか、子どもの本!!』2001)

(6) でもあまり安眠妨害されると実行使をせざるを得ないし、彼等だってお医者さんになれなきゃあ親御さんだってガッカリするだろうしねえ、どうしましょうか?って言ってたよ。(『脳のことなど話してみよう』2003)

一方、割合としては2%に過ぎないが、「ナキャ」を受ける後件が否定的なものではない場合がある(7)。

(7) 「この状況、どう見る?」「恐らく人員は困だろうね。こちらに光火兵器を使わせたいんだろう。困じゃなきゃ、まずは有機衛星同士をある程度交戦させてから転送するのが自然だし」(『ルナティック・ムーン』2005)

(7) は、「困ではない」という仮定的な事態に対して、話し手の「有機衛星同士をある程度交戦させてから転送する」という提案が示されていると解釈で

き、意味的な観点からは、否定的とは判断しがたい。このような用例は3件しか見られず、極少数である。このように、「ナケレバ」と「ナキャ」の両者は、偏りの度合いの差はあるが、「否定的なことがら」を表す主節を導きやすい傾向があり、特に「ナキャ」は「ナケレバ」よりその傾向が著しいことがわかる。ということは、条件的用法において「ナキャ」は、「否定的なことがら」を表す主節を導くことに特化した形式といえる。

## 4.2 非条件的用法 (1) 評価的用法

4.1では、「ナケレバ」と「ナキャ」の条件的用法について見たが、本節からは、非条件的用法について検討していく。

まず、最も割合の多い評価的用法から見よう。前田(2009)では、評価的用法について、条件接続辞「いい」が付属した「すればいい／したらいい／する」と「なければならぬ／したらいけない／しないとけない」のような当為の意味、あるいは評価のモダリティを表現する複合的な文末表現に現れた場合であるとされている。また、高梨(2010)では、事態を受ける接続形式「～と、～ば、～たら、～ては、～ても、～ほうが」と「いい／いけない／ならない」などの評価形式が複合したものである場合を「評価的複合形式」としている。このような「評価的複合形式」は、内部の構成要素の独立度が高く、全般的に文法化の度合いが低いということであると述べられている(高梨2010)。このことは、「評価的複合形式」の認定の問題につながる。つまり、「いい／いけない／ならない」に近接した意味を表す場合、例えば「大丈夫だ／だめだ／困る」などは「評価的複合形式」に含められるのかという問題がそれである。本稿では、慣用表現の典型的な後部要素「いい／いけない／ならない」とそれらに隣接した表現を含めて「評価的用法」の用例として分類した。本調査の結果としては、「いい」に隣接した表現は見られず、「いけない／ならない」に隣接した表現は多様に見られた。以下にその様相を詳述する。

「ナケレバ」: 「だめだ(5)」「意味がない(2)」「おかしい(2)」「できない(2)」「わからない(2)」「無理だ(2)」「無効だ(1)」「無意味だ(1)」「異なり8種類/延べ17件)

「ナキャ」:「だめだ (54)」「わからない (10)」「困る (5)」「嫌だ (4)」「損 (4)」「おかしい (3)」「できない (2)」「まずい (2)」「無理だ (2)」「悪い (2)」「意味 (が) ない (2)」「危ない (1)」「しょうがない (1)」「つまらない (1)」「おかしい (1)」「仕方がない (1)」「嫌いだ (1)」  
(異なり 17種/延べ96件)

また、矢島 (2008) では、「評価的複合形式」の当為表現において、「いい」を「適当」表現、「いけない」などを「不適当」表現と分類している。本稿では、それによって分類を行い、上述の隣接表現の様相を含めて「ナケレバ」と「ナキャ」の「評価形式」<sup>[註5]</sup>との組み合わせの様相を以下の表3に示す。

表3 評価形式との組み合わせ

	適当		不適当			合計
	いい	隣接表現	いけない	ならない	隣接表現	
ナケレバ	6 (1)	0	26 (4)	590 (92.3)	17 (2.7)	639 (100)
ナキャ	19 (4)	0	201 (42.3)	159 (33.5)	96 (20.2)	475 (100)

表3の結果を見ると、「ナケレバ」と「ナキャ」はともに、「適当」より「不適当」を表す「評価形式」との組み合わせが多いことがわかる。「不適当」を表す場合、「ナケレバ」は、「ならない」との組み合わせが9割以上で圧倒的に多いが、「ナキャ」は、「いけない」と「ならない」への偏りは顕著ではない<sup>[註6]</sup>。

一方、「ナキャ」は「ナケレバ」と異なり、不適当を表す「評価形式」に相当する形式との組み合わせが多様に見られる点は注目に値する。これは、「ナキャ」は、「評価形式」に隣接して、意味の具体性もより高く、文法化の度合いがより低い表現との結びつきの許容度が「ナケレバ」より高いということである。ということは、「ナケレバ」は「なければならぬ」という形式に一語化し、文法化が進んでいるが、「ナキャ」は後部要素との組み合わせの固定度が「ナケレバ」より弱く、形態的に独立性が高いといえる。

#### 4.3 非条件的用法 (2) 終助詞的用法

次に、主節を伴わず、従属節となる前件が単独で現れる場合を観察する。こ

のような終助詞的用法は、表1で確認したように、「ナケレバ」は、計10件で1%に留まるが、「ナキャ」は、計159件で18%以上を占めている。

- (8) 時代は変わっても親は親、子は子。親と子の縁を大事にしなければ。ホトケサンを大事にすると先祖の顔に泥を塗らないように生きるようになる。  
(『位牌分け』2001)
- (9) 「お父さんもお母さんも、働かないで妹叩くから、ワタシが助けな~~き~~ゃって思った。シンナーもやめて、一生懸命働いた。でも、ぜんぜんオカネ足りない」  
(『真夏の夜の夢』2005)

(8) (9) のように、文末で用いられる「ナケレバ」と「ナキャ」は、4.2での「評価的用法」の中で、「不適当」を表す「評価形式」の省略形と考えられる。藤井 (2013) では、日本語の条件表現において、右端(発話末)が語用標識化・談話標識化の温床となりやすくなっていると述べている。また、藤井 (2008) では、「～ないと」「～なければ」「～な~~き~~ゃ」「～なくては」「～なくちゃ」で完了する前件発話において当為的「義務」機能が定着している事例等、本来従属節である条件構文の前件節が単独で独立節構文として用いられ、語用標識化している現象が見られるとしている。また、(8) (9) は、話し手が聞き手に対して「ある行為を促す」働きかけが窺え、談話機能としての「働きかけ文」である。ただ、(9) は、働きかけの相手が聞き手ではなく、話し手の自分である点は(8)とはその性質が異なる。だが、「働きかけ」の相手が聞き手であれ、話し手の自分であれ、ある行為の「働きかけ」機能が見られるということは共通する。このような「働きかけ」機能をもつ終助詞的用法は、主節を伴わず、従属節単独で現れる。この用法は、「ナケレバ」は、計10件で1%に過ぎないが、「ナキャ」は、計159件18%以上であり、「ナケレバ」より高い割合を示す。4.2「評価的用法」では、「ナキャ」が「評価形式」に隣接した表現との組み合わせが多様に見られることについて、「ナキャ」の形態的独立性に起因するということを指摘した。後部要素の有無と関係なく、単独形式として現れる「終助詞的用法」において、「ナケレバ」より「ナキャ」が顕著である要因も「ナケレバ」より「ナキャ」の形態的独立性が高いためであると考えられる。

#### 4.4 非条件的用法 (3) 接続詞的用法

一方、「ナケレバ」と「ナキャ」には、文頭で独立的な句として用いられ、接続詞的用法<sup>[註7]</sup>を表す場合がある。この用法は、「ナケレバ」は1件で0.1%に過ぎないが、「ナキャ」は18件で2.1%であり、「ナケレバ」より多く見られる。

(10) どこからかカネが入ってきているのである。でなければ、こんな厳しい経済状態でなければ、そんなことができるわけがない。

(『これでも議員ですか』2001)

(11) だれかにとって納得できないものであったにせよ、なにかの参考にはなるのではないか。でなきゃ、書く意味はない。

(『週末バーテンダーのすすめ』2002)

(10) (11) のように、文頭で現れる「ナケレバ」と「ナキャ」は、単独ではなく必ず「で」を伴うということが特徴的である<sup>[註8]</sup>。藤井 (2013) では、発話冒頭で使われる条件関係の意味範疇について、「ならば」「だったら」「でしたら」「だと」「ですと」「と」「なら」「では」「じゃ」などを挙げ、これらは、本来非自立的に用いられる断定辞「だ」や節接続形態素が発話冒頭でむき出して自由標識的に使用されているものと位置付けている。藤井 (2013) では、発話冒頭で使われる条件関係の意味範疇において、「ナキャ」に関して直接的な言及はないが、断定辞を伴った条件句が発話冒頭に用いられるものとして、藤井 (2013) の挙げる一類に該当すると考えられる。また、接続詞的用法の標識化のプロセスに関して、藤井 (2013) では、「そうなら」「それなら」の使用基盤から「なら」へ、「そうだとしたら」から「だとしたら」、「そうすると」から「すると」へ、というふうに、合成的な指示詞照応型の談話での使用が基盤となっているという仮説が妥当であろう (藤井2013) と述べている。「ナケレバ」「ナキャ」においても、「そうでなければ」「そうで(じゃ)なきゃ」のような指示詞を上接語とする用例が見られ、藤井 (2013) の仮説が適用できる可能性がある。しかし、談話標識化のプロセスについては、共時的データの分析に基づく

一般化は避けるべきであり (藤井2013)、接続詞的用法の標識化の原因についても共時的なデータの分析からは判断しがたく、「指示詞の脱落」に限るのは難しい。ただ、指示詞を上接語とする場合、用例として「ソ」系の指示詞のみ現れることは、踏まえるべき現象である。これに加えて、「で(じゃ)」を伴う文頭の「ナケレバ」「ナキャ」は、「体言性をもつ上接語」と生起しやすい。この上接語が省略でき、接続詞的用法をもつようになる可能性も併せて検討する必要があると考えられる。

また、前田 (2009) は、「接続詞的用法」について、「ソ」系の指示詞や、後置詞的用法と同じく形式化した動詞を伴って、一つの接続詞的な機能を果たす形式となるものと定義し、その例として「考えてみれば」「何とすれば」「できれば」「聞けば」「思えば」「どちらかと言えば」「そう言えば」などを挙げている。これらは、すべて上接句に内容語を伴う場合であるが「ナケレバ」「ナキャ」の場合、内容語を伴わず、「でナケレバ(ナキャ)」という自立的形式を生み出すことができる。このように、形態的独立性が高い「ナキャ」は、文末では終助詞的用法を果たし、文頭では接続詞的用法へその機能が多様になる。その現象は「ナケレバ」「ナキャ」に共通しつつ、「ナキャ」において、「ナケレバ」より顕著であるということが確認できる。

#### 4.5 4節のまとめ

4節では、文の位置変化による否定条件形式の「ナケレバ」と「ナキャ」の用法について検討した。大きく、「条件的用法」と「非条件的用法」に分けて調査を行った結果、「ナケレバ」と「ナキャ」はともに、「非条件的用法」への偏りが大きい。「非条件的用法」としては、「評価的用法」「終助詞的用法」「接続詞的用法」「列挙・並立」に四分類される。「評価的用法」では、「ナケレバ」と「ナキャ」は、「不適當」を表す評価形式と共起しやすい。特に「ナキャ」は、「不適當」と表す「評価形式」に隣接した表現との結びつきが多様に見られる。これは、「ナキャ」の形態的独立性が高いということに起因し、従属節単独で現れる終助詞的用法において、「ナケレバ」より「ナキャ」が顕著である要因にもつながる。また、文頭の独立的な句として用いられる場合では、必ず「で」を伴うということが特徴的である。「でナケレバ(ナキャ)」は、その形態上、「体



(1) (全123件)

「ナキャ」: 「いかん (14)」「いけねえ (4)」「いけません (3)」「いかんです (1)」「ならん (18)」「なんない (13)」「ならねえ (11)」「なりません (5)」「なんねえ (3)」「なるめえ (1)」 (全73件)

[注6] …… 「ナケレバ」が「ならない」との組み合わせが圧倒的に多いのは、歴史的な経緯と関連がある。「なければならぬ」は大正期に至って盛んに使われ、当為表現の代表的な表現形として地位を確保した (田中2001)。後部要素として「いく」系の出現は、「なければならぬ」の定着後、明治以降多用になった (田中2001, 矢島2008)。

[注7] …… 本調査では、「接続詞的用法」の判定において、内容語を伴わずに文頭で現れる場合のみを「接続詞的用法」とする。以下の用例のように、文頭に現れても内容語を伴っている場合は除外し、これらは、「条件的用法」として取り扱う。

- ・ 神でなければ、その契約は神との契約にならないのですから、  
(『ユダヤキリスト・イスラム集中講座』2004)
- ・ これは化物だ。逃げなきゃ、食われちゃうぞ (『新釈水滸伝』2001)

[注8] …… 「ナキャ」の場合、「。じゃナキャ」という形式も2件見られる。

[注9] …… 「ナケレバの」は全17件で、すべての用例が「ナケレバの話」である。「ナキャの」は全2件で、「ナキャの話」1件、「ナキャの一心」1件である。

[注10] …… 例えば「ナラ」に以下のような用例が見られる。

- ・ ここが終わってるならの話ですけど? (『魔女とプレイボーイ』2004)

## 参考文献

- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所 (1964) 『国立国語研究所報告25 現代雑誌九十種の用語用字 第3分冊—分析』秀英出版
- 諸葛珉 (2018) 「ナケレバ節をとる複文の意味機能と構文的特徴—「バ節」との比較を中心に」『人文学フォーラム』1, pp.31-43.
- 高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ』くろしお出版
- 田中章夫 (2001) 『近代日本語の文法と表現』明治書院
- 日本語記述法研究会 (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 藤井聖子 (2008) 「話し言葉の談話データを用いた文法研究: 話し言葉で構文機能が強化する?—「～ないと」「～なきゃ」「～なくちゃ」の文法」長谷川寿一・ラマール, C・伊藤たかね (編) 『心とことば—進化と認知科学のアプローチから』pp.129-151. 東京大学出版会
- 藤井聖子 (2013) 「現代日本語における条件構文基盤の談話標識(化)—その形式と機能に関する類型試案」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』20, pp.87-101.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志 (編) (1993) 『日本語の条件表現』くろしお出版

宮部真由美 (2014) 「望ましくないものをさしだすシナイト節の従属複文—従属節が「仮定条件」を表す従属複文の分析」『日本語文法』14(1), pp.3-19.

村木新次郎 (2002) 「第三形容詞とその形態論」佐藤喜代治 (編) 『国語論究第10集 現代日本語の文法研究』pp.1-28. 明治書院

矢島正浩 (2008) 「近世中期以降上方語・関西語における「評価的複合形式」の推移」『国語と国文学』85(2), pp.55-69.

